

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02789

研究課題名（和文）小学生の言語的課題の解決に向けた日本語学・心理学の連携的研究

研究課題名（英文）Studies for linguistic issues facing primary school children

研究代表者

岩男 考哲（IWAO, Takanori）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：30578274

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究が当初に抱えた課題は、小学生の抱える言語的課題の原因を探るというものであった。その課題とは小学生間に語彙の質に差が見られること、主語・述語等の文構造の理解力に差があること、である。こうした課題に対して本研究は、低学年向けの絵本や教材の徹底した調査を行った（新型コロナウイルス蔓延により、児童の対話場面の調査が行えなくなり、教材分析に注力せざるを得なくなったためでもある）。その結果、対象年齢が低くなるほど、より現場依存的（辞書等に登録されていない「臨時的」）な表現が多用されることを明らかにした。こうしたことから、子供の言語的発達は現場依存から現場独立というモデルが想定されていると推測できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

低年齢向けの教材には現場依存的あるいは対者の支えが必要な言語表現が多用されることが明らかになった。この結果から、小学生の抱える言語的課題の原因の一端が説明できる。小学校へと入学し、子供たちは「個」としての対応を受けづらくなる。一方、彼らが触れる言語表現もより状況非依存的なものへと変化する。子供たちの間の言語理解の差が生じる原因とは状況依存から非依存への言語表現の質的变化についていけないことであり、「個」として受けられていたはずの支援の不在もそれに拍車をかけている。この指摘によると他者に比べ言語理解が劣る児童への対応は「個」によるものが望ましいということになる。教育面において重要な指摘と言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to investigate the causes of linguistic problems among elementary school students. The main issues identified were variations in vocabulary quality and difficulties in understanding sentence structure among students. To address these issues, we conducted a thorough analysis of picture books and textbooks. This shift in focus was necessitated by the COVID-19 pandemic. We found that the younger the target age group of these books, the more frequently they employed highly context-dependent expressions. These findings suggest that children's language development may transition from being highly context-dependent to more context-independent.

研究分野：日本語学

キーワード：教材分析 児童 言語的課題

1. 研究開始当初の背景

中央教育審議会答申に「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」という指摘があった。更には、小学生の主語を捉える力や文の構成の理解・表現の工夫を理解する力に課題があることが全国学力・学習状況調査等の結果によって明らかにされていた。

これらの課題に対して、どういった対応が可能であるかを考えた時、本研究開始前の時点では具体的な根拠に基づいた対応はとりづらい状況にあった。それは、何が原因で上記のような課題が生じているのかが十分に明らかにされていないからである。これは、従来の幼児期の子供を対象とした研究は、言語の習得能力に焦点を当てたものが主であり、小学校国語との連結の在り方に焦点を当てた研究は見られないことに起因すると我々は判断した。このままでは、この先も我々は小学生の言語的課題に対して、いわば対処療法的な対応を取り続けざるを得ない。

こうした背景のもと、本研究は計画された。

2. 研究の目的

本研究では、下記(ア)～(ウ)の3点を考察することで、小学生の言語的課題の要因を明らかにし、その結果に基づいた言語的課題解決のための授業計画や教材作成を目指した。

- (ア) 幼児期と小学生の言語環境の内実はどのようなものか。
- (イ) 幼児期と小学生の言語環境の異同はどのようなものか。
- (ウ) 言語的課題の原因に日本語の言語的特質や子供の発達段階がどの程度関与するか。

上記の考察を行うために、具体的には次の3点到注力する計画を立てた。

① 小学生の言語能力との比較を目的とした幼児期の調査の実施

幼児期の言語研究は主に言語習得能力に主眼が置かれたものであるのに対して、本研究の目的は幼児たちが接する言語環境の実像を描き出すことにある。これは本研究が従来の研究とは異なり、小学生の抱える言語的課題の解決を目的とするためである。

② 幼児期と小学生の言語環境の(同一の観点からの)比較

従来、小学生の言語的課題にいかに対処するかは議論されてきたが、その原因を探る試みはなされてこなかった。本研究において幼児と小学生の言語環境を同一の観点から比較することにより、小学生の抱える言語的課題の原因の一端(幼児と小学生の体験する言語の差異等)を探ることが可能である。また、そこに心理学(発達研究)の知見を導入することで当該の課題が言語的なものなのか発達のなものなのかも明らかにできる。

③ 言語研究と幼児発達研究との新たな観点からの学際的研究の実施

本研究では、言語に関する専門的知見と児童の発達に関する専門的知見とが必要とされる。従来言語習得能力の研究においてこうした専門家が共同で研究を行うことはあったが、本研究はこれまでとは異なる着眼点での学際的研究の一例となり得る。

3. 研究の方法

本研究開始当初、以下の2つの研究活動を通して、小学生の抱える言語的課題の解消を目指していた。しかし、対面調査を計画していた年に新型コロナウイルスが蔓延し、その結果、児童への対面での言語調査が不可能となった。

そこで計画を変更し（具体的には下記②で行う予定であった対面調査を減らした）、教材や児童向けの書籍の調査のウェイトをより増やすことで研究の完成を目指した。

① 言語環境実態調査の予備的研究の実施

ア) 言語的課題の整理

調査の基盤となる作業を行う。具体的には小学生の言語的課題とされている項目についての基礎的文献のレビューならびに、本研究において注目する言語的パラメータを決める。例えば、「主語の理解」の過不足をより正確に知るためには、言語のどういった現象に着目するのが効果的であるのか等、上記の言語的課題をより厳密に知るための手法を選定する。それに基づいて調査対象とする項目のリストの作成も行う。

イ) 予備的調査

ア) で作成した調査項目の妥当性を確認するために幼児期に子供が触れる書籍を対象に、大人（保護者、保育士）と幼児の会話を対象にそれぞれ予備的な調査を行う。そこから得られたフィードバックに基づいて、調査リストをより洗練させていく。

② 幼児・小学生の言語課題の実態調査の実施

ウ) 幼児の接する言語環境の実態調査

幼児期に触れる言語環境の代表として絵本を対象にその言語的特徴を抽出する。ここでは紀伊国屋グループのランキングを基に行う。データが不十分だと判断される場合は児童の保育園や幼稚園での友人や大人との会話場面における言語の実態調査を行う（ただし、上記のように新型コロナウイルス蔓延により、対面調査は断念）。

エ) 小学生の接する言語環境の実態調査

小学生の言語環境について、イ) と同一視点で調査を行う。主たる調査対象は国語教科書や他教科の教科書とする。データが不十分だと判断される場合は小学校での友人や教師との会話場面における言語の実態調査を宮地が行う。

4. 研究成果

本研究が当初に抱えた課題は、小学生の抱える言語的課題の原因を探るというものであった。その課題とは小学生間に語彙の質に差が見られること、主語・述語等の文構造の理解力に差があること、である。こうした課題に対して本研究は、低学年向けの絵本や教材の徹底した調査を行った（これは、上述のように新型コロナウイルス蔓延により、児童の対話場面の調査が行えなくなり、教材分析に注力せざるを得なくなったためでもある）。

その結果、対象年齢が低くなるほど、より現場依存的（辞書等に登録されていない「臨時的」な表現が多用されることを明らかにした。こうしたことから、子供の言語的発達は現場依存から現場独立というモデルが想定されていると推測できる。

この低年齢向けの教材には現場依存的あるいは対者の支えが必要な言語表現が多用されるという結果から、小学生の抱える言語的課題の原因の一端が説明できる。小学校へと入学し、子供たちは（教室という「公共」の場に入ること）「個」としての対応を受けづらくなる。一方、彼らが触れる言語表現もより状況非依存的なものへと変化する。つまり、子供たち間の言語理解の差が生じる原因とは「状況依存」から「非依存」への言語表現の質的変化についていけないということであり、「個」として受けられていたはずの支援の不在もそれに拍車をかけている。

この指摘によると他者に比べ言語理解が劣る児童への対応は「個」によるものが望ましいということになる。既に個別対応という選択肢を用意している教育機関であれば、少なくとも本研究の成果に基づけば、その対応は間違いではないということになる。これは教育面において重要な指摘と言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岩男考哲, 宮地弘一郎	4. 巻 2022
2. 論文標題 調査に基づく児童の語彙獲得に関する日本語学・発達心理学の領域 横断的考察 重い身体障害児の【教育】から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年中国文化大学日本語文学科国際シンポジウム SDGs 持続可能な開発目標 とのコラボレーション 会議論文集	6. 最初と最後の頁 103-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 武田彩花, 宮地弘一郎	4. 巻 21
2. 論文標題 知的障害のある自閉症児が主体的に取り組みながら力を発揮する授業	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育実践研究	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩男考哲・宮地弘一郎	4. 巻 2021年
2. 論文標題 児童の語彙獲得に関する日本語学・発達心理学の領域横断的調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021年中国文化大学国際・外国語文学部日本語文学科国際学術シンポジウム 跨越領域の学術研究 (Interdisciplinary Research) : 時間と空間の交差論文集	6. 最初と最後の頁 152-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 宮地弘一郎, 下山真衣, 永松裕希, 上村恵津子, 奥村真衣子, 原 洋平 桐原 礼, 志村佳名子, 伊藤冬樹, 間島秀徳, 松澤泰道, 藤田育郎, 杉山俊一郎, 八木雄一郎, 小松孝太郎	4. 巻 20
2. 論文標題 特別支援教育（主に知的障害）における教科の「見方・考え方」の追求 教職大学院学生を対象とした教科分野研究者との連携授業から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要 教育実践研究	6. 最初と最後の頁 149-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩男考哲	4. 巻 30
2. 論文標題 基礎研究に基づいた教材分析試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信大国語教育 信州大学国語教育学会30周年記念号	6. 最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮地弘一郎	4. 巻 45
2. 論文標題 重症心身障害児 (者) 病棟の日常における人関連刺激に関する調査 . スタッフへの質問紙調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本重症心身障害学会誌	6. 最初と最後の頁 157-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮地弘一郎	4. 巻 45
2. 論文標題 重症心身障害児 (者) 病棟の日常における人関連刺激に関する調査 . 病室のVTR記録と事例の心拍測定による検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本重症心身障害学会誌	6. 最初と最後の頁 163-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩男考哲・宮地弘一郎	4. 巻 2019
2. 論文標題 日本語を母語とする子どもたちが触れる語彙調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019年中国文化大学日本語文学科国際学術シンポジウムー日本の言語・文化・思想・宗教・社会・歴史に関する研究と教育ー論文集	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田巻義孝; 堀田千絵; 宮地弘一郎; 加藤美朗	4. 巻 14
2. 論文標題 自閉症の症状について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 349-369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 岩男考哲, 宮地弘一郎
2. 発表標題 調査に基づく児童の語彙獲得に関する日本語学・発達心理学の領域横断的考察 重い身体障害児の【教育】から
3. 学会等名 2022年中国文化大学日本語文学科国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤創, 藤原康弘, 岩男考哲, 仲潔
2. 発表標題 学習者の母語に即した「やさしい言語 (日本語) 習得」をめざして
3. 学会等名 第六回アジア未来会議 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩男考哲・宮地弘一郎
2. 発表標題 児童の語彙獲得に関する日本語学・発達心理学の領域横断的調査
3. 学会等名 2021年中国文化大学国際シンポジウム: 外語学院日本語文学系国際學術研討會 跨領域學術研究 II Interdisciplinary 時間與空間的匯流 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩男考哲・宮地弘一郎
2. 発表標題 日本語を母語とする子供たちが触れる語彙調査
3. 学会等名 2019年中國文化大學日本語文學系國際學術研討會 日本之語言・文化・思想・宗教・社會・歷史相關研究與教育（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ito Hajime, Iwao Takanori, Naka Kiyoshi
2. 発表標題 The empathy hierarchy in a reference/ target prominent language and a trajector/ landmark prominent language
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia Biennial Conference (國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮地弘一郎；渡邊流理也；堅田明義
2. 発表標題 重度肢体不自由児の生活空間上の視線情報共有に関する検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宮地 弘一郎 (Miyaji Koichiro) (40350813)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------